五條市 陀々堂の鬼はしり（国指定　重要無形民俗文化財）

満月下、500年以上受け継がれる火の祭典

今年初めての満月になった14日、５００年以上伝承され国の重要無形民俗文化財に指定されている「陀々堂の鬼はしり」が五條市大津町の念仏寺で営まれた。厄を除け、幸をもたらすとされる赤、青、茶の３鬼が、燃え盛る松明（たいまつ）をひざに抱えて本堂から姿を見せ、境内にあふれる参詣者らが荘厳な営みを見守った。

福餅まきは、たくさんの人が福にあやかろうと手を伸ばした

燃え盛る松明の準備。鬼役らが打ち込んでいく。

無心でこよりを作る鬼役ら

堂内では保存会の行者らがたいまつの火をくべて準備

次世代を担う「子ども鬼はしり」の直前練習

昼の鬼はしりにも多くの参詣者でにぎわった

本堂では厳かな空気の中、僧が経を読み上げ、祭事の無事と参詣者の１年の平穏無事を祈った

柴灯護摩供では高く炎が舞い上がった

鬼はしりは、室町時代から、途切れることなく毎年1月14日に営まれる。昭和30年代から40年代ごろまで使われた鬼の面には、文明18（１４８６）年の墨書があり、少なくとも５００年以上の歴史がある。平成7（１９９５）年に国の重要無形民俗文化財に指定されている。

鬼が持つ松明は、五條市阪合部地区の人々を中心に組織する「鬼はしり保存会」（辻本英夫会長）が準備している。毎年暮れ、山へ松の木の根を掘りに行き境内で保存。４年前のよく乾燥した松の木の根を、鬼役らが割り、抱える松明を前々日に作る。

松明は持ち手があり、こちらは短めに割った木を、「顔」と呼ぶ向こう側はよく燃えるよう長めに割った木を打ち込んでいく。赤の父鬼、青の母鬼、茶の小鬼の順で本堂を巡るため、赤鬼に続く青鬼の松明は特に着火が早くなるよう計算して打ち込む。先人から教えられた作法や工夫を守り、総重量60キロにもなる鬼の松明を完成させる。

鬼役らは年始の8日から「行」に入り、肉や魚は口にすることができないしきたりで、精進料理を食べる。また家族と同じ火を使う料理も禁じられており「別火精進」の料理をいただき、毎日、身を清める「水垢離（みずごり）」をして鬼はしりの当日を迎える。

加えて鬼役らは前日、身体に巻き付ける「こより」を作らなければならない。鬼一体につき「長手（ながて）」と呼ばれる全長１５０センチのこよりが32本必要。無心になって紙をねじり、こしらえていく。

当日、午後1時から僧らの般若心経転読がはじまり、無灯火の「昼の鬼はしり」、次世代の子どもたちが伝承していくため、所作を学んで披露する「子ども鬼はしり」が行われた。

その後、鬼役らと、平岡清司市長、地元の斎藤有紀県議、福塚実市議、仲山嘉市議らの福餅（もち）まきが行われ、ごった返した多くの参拝客が福をつかもうと手を伸ばした。

日が落ちた午後7時半からは、柴灯護摩供が執り行われ、燃え盛る炎に参詣者らは無病息災や家庭円満の祈りを込めて手を合わせ、炎は高く上がった。

堂内では保存会や地元の行者らが松明の火をくべて準備。すぐに着火できる状態まで松明を温める。午後9時鳴り響く法螺貝の中、いよいよ松明に点火。堂の正面に躍り出て、勢いよく燃える松明を振って「水」の字を描く「火天（かって）」が登場。その後、赤、青、茶の3鬼が、火の粉をまき散らしながら、燃え盛る松明を片膝に抱え、荘厳な姿を見せた。

その様子を県内外から集まった参詣者や、外国から訪れた人たちがカメラのシャッターを切ったり、スマホを向けたり、境内は熱気に包まれた。

鬼が身に着けていた「こより」は、健康無事や家内安全、五穀豊穣、合格祈願などさまざまな御利益があるとされ、参詣者らが鬼役から奪い合った。